

あまりに立とうとしな
いクララにハイジがブ
チギレるお話

hasegawa

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

よくある一発ネタです。

キャラ崩壊にご注意下さいませ。

目次

あまりに立とうとしないクララにブチギ レるハイジ。	1
神も仏も無いような、フランダースの犬	10
母をたずねて来たものの、何かがおかし い事に気付くマルコ	15
お別れの時は意外と淡泊な、あらいぐま ラスカル。	28
どんなハプニングもその強靱な想像力で 乗り切って行く、赤毛のアン。	35
隕石が落ちてきて世界が滅んだらいいの に、と思う小公女セーラ	53

おまけ	♪
おまけ。その2	

あまりに立とうとしないクララにブチギレるハイジ。

「クララのバカアアアアー……っ!!」

アルムの山に、ハイジの声が響き渡りました。

「なによ意気地なし! 一人で立てないのを足のせいにしてっ。」

もう足はちやんと治ってるわっ!」

クララは今日まで、ハイジやおじいさんに協力してもらいながら、立てるようになる為の訓練をおこなってきました。

しかしその痛みと辛さから、なによりクララ自身の臆病さから中々思うようにいかず、ついハイジに対して辛くあたってしまったのです。

——私的事なんてほっといて頂戴。ハイジの言うように、すぐ歩けるようになってならないのよ。

これまで必死に協力してくれたハイジを裏切るような言葉。思わず出てしまった弱音。

そんなクララの情けない姿に、友達のように……、ハイジは怒りを覚えたのです。

「クララの甘えん坊っ！ 怖がりっ！ 意気地なしっ！」

……どうして出来ないのよっ!? そんな事じゃ一生立てないわっ！」

ハイジの目から涙が零れます。それは心からクララの事を思うがゆえの、感情の爆発でした。

「クララのバカッ！ 弱虫！ 意気地なし！」

アホ！ ボケ！ カス！ ブス！ ウジ虫！ 死ね!!」

「ハイジッ?!?!」

この甘ったれた腐れ西洋人のボンボンに、ハイジの怒りが炸裂します。

こちらと親戚中をたらい回しにされ、挙句こんなアルプスの辺境での小屋暮らしだというに！ 自室の窓にはガラスすらありません。

なに不自由なく生活してきておいて、甘ったれるんじゃないわよ小娘がと！

「クララのバカ！ クソ虫！ あたしもう知らないっ！」

クララなんてもう知らないわあ〜っ！」

「ハイジッ！ 待って頂戴ハイジッ!!」

ハイジが「うわーん！」と泣きながら、この場を走り去ります。

追いつがるうにもクララの足は動かず、どんどんハイジの背中が小さくなっていきま

す。

「ピュ〜イ！ ユキちゃん！」

ハイジの指笛に呼ばれ、この場に現れた子ヤギのユキちゃん。

その背中に颯爽と跨り、もう情け容赦の無いスピードでこの場を走り去って行きま
す。全力です。

「ハイジ！ 待ってハイジ!!」

クララも即座に愛用の車いすに乗り込み、何やらガチャガチャとレバーだのスイッチ
だのを操作します。

するとクララの車いすの後部から「ガシャーン!」とジェットエンジンのような物が
飛び出し、即座に炎を噴射。

凄まじい速度で車いすが前進していき、ハイジを猛追します。

「なによクララ！ そのジェットみたいなの!!」

どうせそれも、クララの家が民草から搾取したお金で作ったんでしようっ!?

クララのバカ！ ゴミクズ！ 特権階級!! わたしもう知らないっ!!」

「待って！ 待って頂戴ハイジッ!!」

「パカラパカラ!」と走るハイジ。ジェットエンジンにより「ゴゴゴゴ!」とばかりに追
いかけるクララ。意外にもそのスピードは互角、白熱した戦いです。

「……ッ!? クララッ!?」

しかしコーナーを曲がり切れず、クラッシュしてしまうクララ。

身体はマシンから放り出され、凄い勢いで地面に叩きつけられました。

「いたた……。あら、いけないいけない」

ムクリと立ち上がり、クララはスタスタとマシンのもとに向かいます。

転倒はしましたがマシンは無事。どこも壊れていない事をチェックし終えたクララは、まだまだいけるとばかりに再び車いすに乗り込みます。

「ハイジッ!! 待って頂戴ハイジッ!!」

再び炎を噴出する、クララ車のジェットエンジン。

「クララのアホオオー……ッ!!」

ライバルが復帰したのを見届けた後、ハイジの乗る子ヤギのユキちゃんも、走りを再開させました。

どんな事があるとも、この勝負^{レース}だけは譲れないのです。

チェッカーフラッグを受けられるのは、ひとりだけなのだから——

「あつ、あそこにペーターがいるわ!」

「ちようどマシンの前方にペーターが!!」

突如コース上に現れたペーター。

勢いを殺す事が出来ず、二人はペーターに突っ込んで行きます。車は急に止まれません。

「うぎやあああああー………ツツツ!!!」

天高くペーターの身体を跳ね飛ばし、二人のマシンはようやく停止する事が出来ました。幸運にも二人は無傷です。何の問題もありません。

「よくもペーターを！　なんてひどい事するのクララ！

もう生きてアルムの山から帰さないわっ!!!」

「待つて！　違うのハイジ!!　聞いて!!」

ハイジはピョインと子ヤギの背に飛び乗り、そこからフライングクロスチョップを慣行します。

「死ねええええーツツツ!!!」

本職のルチャ・ドーラもかくやという華麗な技が、クララに襲い掛かります。

「ハイジイイイイーツツツ!!!」

それを華麗な車いす捌きで回避するクララ。躲されたハイジはへべちやつ!〜と地面に倒れてしまいました。

「ああっ！　ハイジ大丈夫？　怪我はない？」

「えへへ、ありがとうクララ。わたしは平気よ♪」

クララはテテテとハイジに駆け寄り、優しく抱き起します。

そしてハイジの無事をしっかりと確認した後、再び「よっこいしょ」と車いすに乗り込みました。試合再開です。

「それじゃあ改めて……なによクララのバカ！ 意気地なし！

そんなんじゃ一生立てないわ！ この便所コオロギ!!」

「ハイジ！ 待つて頂戴ハイジ!!」

再びハイジがクララに襲い掛かり、今度はハンセンばりのウエスタンリアットを慣行します。

しかしクララは冷静に対処し、その向かってきた腕を掴んで、そのままビクトル式腕ひしぎ逆十字固めに入りました。

「ぎやあああーッツツ!!!」 折れる折れる折れる折れるッツツ!!!」

「聞いて頂戴ハイジ！ 話を聞いて!!」

ハイジの腕をしつかり極めながら、クララはネゴシエーションを試みます。

先ほどはごめんなさい。私これからしっかりと練習する。そして立てるようになるわ。どうしてもそうハイジに伝えたいのです。

逃げ出せないようしっかりと腕をギリギリしながら、真心を持ってハイジに語りかけます。華麗な技です。

「腕の一本くらい、クララにあげるわ！」

二度とステーキの食べられない身体にしてやる!!」

「ハイジ! 待って頂戴! ハイジ!!」

渾身の力を込めて、ハイジが技を振りほどきます。

腕ひしぎを外されたクララがテテテと車いすに駆け戻り、三度「よっこいせ」と座り直しました。

「いくわよクララ! 半月板損傷し……………」

「ってあれ? クララいま立ってなかった?」

「ううん? 立ってないわ?」

「そっか!」

さつきからチオイチオイ立ってるような気がしたけど、わたしの気のせいね!

じゃあいくわよクララ!! アバラへし折ってやるわ!!」

「お願い! 話を聞いてハイジ!!」

……その後も暗くなるまで拳で語り合った二人は、迎えに来てくれたおじいさんと一緒に山を下り、仲良く手を繋いで家に帰って行きました。

今夜のご飯は、チーズの乗ったパンとミルク。

やがて沢山食べてお腹がいっぱいになった二人は、一緒に干し草のベッドに入りました。明日はどんな事をしようか、そう楽しく語らいます。

「ねえクララ？ やっぱり今日、普通に歩いてなかった？」

「ううん？ 歩いてないわ？」

明日もたくさん、一緒に遊ぼうね——

そう約束し合い、眠りに落ちていくのでした。

神も仏も無いような、フランダースの犬

前も見えない程の大吹雪の中を、パトラッシュが歩いていました。

時折地面を掘り返し、匂いを辿りながら。自身のご主人さまである「ネロ」という少年を探し求めて歩いておりました。

やがて匂いを辿って歩いてみると、パトラッシュはとある美術館へとたどり着きます。

中に入ってみると、そこには最愛のご主人様の姿。

一枚の大きな絵の前で、ネロが今にも力尽きそうな様子で、床に倒れ伏していたのです。

「……やあパトラッシュ。……迎えに来てくれたのかい？」

パトラッシュはネロの傍に寄り添い、身体を床に伏せます。

「お前はずつとぼくと一緒だって……そう言ってくれてるんだね……？」

「ありがとう……」

その背中を、ネロは優しく撫でてあげます。

そして慈しむようにパトラツシユを抱きしめました。

「……パトラツシユ……。ぼくは見たんだよ……。」

一番見たかったルーベンスの絵を、やっと見れたって……、

そう……思っただけ……。」

ネロが指さす方を見てみると、そこには壁一面の大きな絵。視界一杯に広がる大きな絵がありました。

「……でもこれ、よく見たらルーベンスの絵じゃなくて、ただの工口絵画だったよ」

吹雪の中を歩き続け、ようやく辿り着いてみれば、そこにあつたのは工口絵画。

やけに肌色の多いその絵は、決してネロが見たかったルーベンスの絵なんかじゃありません。しよーもない工口絵画です。

「だからぼくは、今すーごく……不幸なんだよ……?」

必死で歩いて来たのに。心身共にボロボロになりながら、ここまでやって来たのに……。

神も仏もあつたモンじゃありませんでした。

「……パトラツシユ、疲れたろう……? ぼくも疲れたよ……。」

最後に見たのが、ルーベンスの絵じゃなく工口芸術だなんて、死んでも死に切れないよ……。」

そう言つてネロは、力尽きたようにグテツとなります。

パトラツシユもご主人様と同じようにして、床にグツタリします。

「…………どうしようパトラツシユ？ 上からめっちゃ天使降りて来てるよ…………」

こればかり、このまま連れていかれちゃう感じのヤツだよ…………。血も涙もないよ…………」

あんなに良い子にしたのに、あんなに頑張つて来たのに、最後はこの仕打ちか。

ぼくにルーベンスの絵も見せず、しょーもないエロ絵画をご褒美にして、天国へ引つ張つていこうというのか。

ぼくが信じた神とは何だったのか。これも何かの試練だとしても言うのか。

このまま世界が雪に埋もれてしまえば良いのにと、ネロはちよつとだけ思いました。

「…………ツ!? 今なにか聞こえた…………。アロアの声が聞こえた気がする…………」

幻聴だったのか、それとも身体に残された最後の感覚だったのか。ネロはアロアが自分の名を呼ぶ悲痛な叫び声を、確かに聞いた気がしました。

「…………死ねない…………死ねないよ…………アロアも待つてるっていうのに…………、

こんなエロ絵画を見せられたくらいで素直に成仏だなんて、

ぼくには出来ないよパトラツシユ…………」

ちよつと起きておくれパトラツシユ？ 力を貸しておくれ？

ネロは眠りに落ちそうだったパトラッシュの身体をユサユサし、申し訳ないけれど起きてもらいました。

「ほら、一緒に天使さんを追っ払おう？　今回は勘弁して貰おう？」

……なんだろう？　無駄に身体に力が湧いてくる……。

これつてもしかして……さつきエロ絵画を見たせいなのか……？」

これ見たのがルーベンスの絵だったら、ぼく死んでしまったのかな……？　エロ絵画を見た事により何か得体の知れない不思議なパワーを貰ったおかげで、今ぼく生きてるのかな……？

そんな事を考えながらネロは静かに立ち上がり、上から降りてくる天使たちに向かって、両手で「バツ」の形を作ります。

アンタら今日は帰ってくれ。また何十年かしたら来ておくれ——

ジェスチャーに加えてそう心の中で語り掛けると、やがて天使たちは「あーホンマっすかー」みたいな感じで、帰って行ってくれたのです。

「——帰ろっかパトラッシュ。……はやく帰って、ベッドで寝たいんだ」

穢れ無き少年であるネロにはまだ随分早かったであろう、エロ絵画。

それを見て毒されてしまった心と精神を回復させたい。一刻も早く忘れてしまいた

い——

そんな風に願いながら、ネロはパトラツシユ共々美術館を後に行きます。表にはちようどアロアが迎えに来てくれたので、ネロは何の問題も無く、暖かい家へと帰還する事が出来ました。

今日見てしまった絵の事は、アロアにはナイシヨにする事にしたのでした。

母をたずねて来たものの、何かがおかしい事に気付くマルコ

暗く生い茂げった夜の森を、マルコは歩き続けます。

この森を抜ければ、お母さんに会える——その一心のみで足を動かし、泣きながら歩き続けました。

やがてマルコの目の前に、一軒の大きな家が現れます。

ここにお母さんがいる。会いたくて会いたくて堪らなかつた、ぼくのお母さんが！

自分のポロポロの身体の事も、爪が割れてジンジンと痛む足の事も忘れて、マルコは家に駆け込んで行きます。

ジェノバからアルゼンチンまで……。ここがマルコの3千里にも及ぶであろう、長い旅の終わりでした。

自分の名前と身の上を家の方に告げ、案内された一室にてマルコが見た物。

それは病に倒れ、熱にうなされ苦しんでいるお母さんの姿でした。

本当は抱きつきたかった。抱きしめて欲しかった。

その胸に勢いよく飛び込んで、よくここまで来たね、頑張ったねと褒めて欲しかった。……しかし床に臥せているお母さんの姿に、マルコはその場で立ちすくんでしまします。

やがてマルコはベッドの傍へと近寄って行きましたが、熱に苦しむばかりのお母さんは、マルコに気が付く事すらも出来ません。

故郷から遠くはなれたこのアルゼンチンまで、家族の為にと出稼ぎにやって来たマルコのお母さん。

彼女はこの地でひとり懸命に働きましたが、突然連絡の取れなくなってしまうたマルコたち家族の事が心配で心配で……、その心労により身体を壊し、ついには重い病気にかかってしまったのでした。

「僕だよ、マルコだよお母さん……。約束通りアルゼンチンに来たんだ」
「どうして黙ってるんだよお母さん……。」

何ヶ月もかかって、やっとお母さんを見つけたんだ。

目を開けて……、僕を見ておくれよ」

そんなお母さんの姿を見て、マルコの胸はとても苦しくなりました。

「もう離れない……。僕はいつまでもお母さんと一緒だよ。

……父さんや兄さんも心配してる。

母さんがどうなったかって……。とつても心配してるから……」

お母さんにしがみつき、ポロポロと涙を流すマルコ。

——その時、突然の爆音が静寂を切り裂きました。

『 待てえい!! そのお母さんはニセモノじゃああーッッッ!!! 』

突如ドアをブチ破り、ひとりの女性が部屋の中に飛び込んで来ます。

「それは母などではないぞマルコッ!!」

この我がつ、本当のお母さんじゃああーッッッ!!!」

ベッドを指さし、そう高らかに宣言する筋骨隆々の女性。

マルコは思わず啞然とします。こんなラオウみたいな女の人、今まで見た事ありません。

「さあッ! こちらへ来るのじゃマルコッ!! この母のもとにッッ!!」

断じてそやつは貴様の母ではなあああーッッッ!!!」

その大声にビククリし、マルコはお母さんにキュツとしがみつきます。縋り付くのに

加えて、無意識に母を守ろうとしたのでしよう。

……しかし今、ベッドに横たわっているお母さんが、ボソリと小さな声で呟きます。

「——フッ。まさかバレていたとはな」

「えっ、お母さんっ?!?!」

ふと見れば、まるで悪役みたいな顔で「クツクツク……」と笑うお母さん。あの美しかった口元は醜く歪み、まるで別人のようです。

「マルコツ!! そやつから離れるのだツ!!」

ぬうええええええええええええええええええええええええ!!!!」

マルコのお母さん（自称）がフライングボディプレスを敢行し、ヘドゴーン!〜とベッドを粉砕します。

しかし素早くベッドから退避したお母さん（偽）が、シュバツと忍者のような身のこなしで、窓に飛び乗りました。どこが病人やねんという動きです。

「クツクツク……あと少しでマルコの母となれたものを。」

……まあ良い。ここはいったん退くとしよう……!!」

「まつ、待てえい!! きつつさまあああ~~~~ツツ!!」

そう言い捨てたお母さん（偽）は、まるでハヤブサのように夜の森を駆けて行き、瞬間にどこかへ消えて行きました。

マルコはその様子を、ただただ呆然と見送ります。状況を理解出来ないまま。

「くっ！ なんとという逃げ足の速さよっッ!! だがもう心配は無いッ!!」

……マルコよッ!! 貴様はこの母がッ、必ず守り抜いてみせるッッ!!」

マルコの肩を抱き、ニカツと暑苦しい笑顔を見せるお母さん（真）。そのはち切れんばかりの胸筋、鍛え上げられた丸太のような腕に、マルコは驚愕します。

「さあジエノバへ帰ろうぞマルコよッ!!」

我はもう一生ッ、マルコの事を離しはせぬッ!!!」

そう言い放ち、お母さん（筋肉）は「よっこらせ」とマルコを担ぎ上げます。もう成すがままに肩に乗せられ、マルコの目はまん丸になりました。

僕はこれから、この人と暮らすんだね——

お父さんもお兄さんもビックリしちやうだろうな——

窓から逃げていったお母さん（偽）が一体なんだったのか。そんな事は子供であるマルコには分かりません。

難しい事は大人の人達に任せ、とりあえずはもうこのまま流れに身を任せてしまおうとマルコが考えていた、その時——

『騙されるなッ!! そいつはニセモノだあああッッ!!』

突然出入り口に現れる謎の女性。そしてその後ろには、銃を構えている沢山の男の人達の姿がありました。

「撃てええーッッ!!」

「ぐうおあああゝゝッッ!!!」

一斉に火を噴いた銃撃により、マルコのお母さん（筋肉）が雄たけびをあげます。

「マルコッ、そいつはお母さんなんかじゃないわッ!!」

私こそ、本当のお母さんよッッ!!」

お母さん（筋肉）にゲシッとはひと蹴り入れて、軍服を着た女性が即座にマルコを抱え上げて、その場から救出します。

数多の戦場を潜り抜けてきたであろう鋭い眼光、そして独眼流よろしくの眼帯がかっこいい女の人です。

軍服の女性はマルコを背中に隠し、目の前のお母さん（筋肉）と対峙します。

「——ふっ、バレてしまつては仕方ないッ」

「おっ、お母さんっ!?!」

「すまぬ……：私はマルコの母では無いッ!! 本当の母などでは無いのだッッ!!」

マルコは一応おどろいてみるも、内心は「まあそうだろうな」みたいに思いました。

だって今まで会った事ないもん。見た事ないもんこんな人。

「さらばマルコツツ!! ぬうええええ〜いツツ!!」

「まつ、待ちなさいッ! この筋肉ダルマ!」

やがてマルコのお母さん（筋肉）は窓ガラスをブチ破り、夜の森へと消えて行きました。

マルコは呆然とそれを見送りましたが、内心「あの人がお母さんじゃなくてよかった……」みたいに思いました。

「……くっ、まさかAKの効かない化け物だなんてっ!

でももう安心よマルコ? これからは私が貴方を守るわ」

マルコの肩を抱き、そう宣言するお母さん（大佐）。

二人の感動の再会に気がつかってか、部下の男の人達もゾロゾロと部屋を出て行きます。「よかったよかった」みたいに。

「さあ帰りましょうマルコ! 我が麗しの祖国へッ!!」

ロシアの大地が貴方を待っているわっ!!」

マルコはイタリアのジェノバの生まれなのですが、いつの間にかロシア空軍に行く事になっていました。

満面の笑みでマルコの肩を抱くお母さん（大佐）。もうマルコを軍人にするつもりマ

ンマンです。

ボルシチってどんな味なんだろう？ ロシアだしもうちよつと着込んで行かないと寒いかな？ そんな事をマルコが心配していた——その時。

『騙されちゃ駄目アル!! そいつは偽物アルツ!!』

突然「アチョー!!」とばかりにお母さん（大佐）に飛び蹴りをかますチャイナ服の女性。

髪はお団子で、なにやらカンフーチックな構えをしています。

「マルコ！ ようやく会えたアル！ あたしが本当のお母さんアルよ!!」

「ウソだつ！ 貴方はアジア人じゃないか！ 僕はイタリアンだ!!」

流石にこれにはマルコもツツコミますが、中華の女性は気にする素振すらありません。

「あなた何者アル!! あなたはマルコのお母さんじゃないアル!!」

「——ふつ。まさかバレているとはな」

マルコは「そろそろだろ」みたいに思いましたし、また「お前もお母さんと違うわ」的な事も思いました。

しかし、なんか二人の醸し出している真剣な雰囲気壊す事が出来なくて、口を出せずにいます。

僕の本当のお母さんは、どこへ行つてしまったのだろうか？ とりあえずそんな事を考へておく事にしました。軽い現実逃避です。

「仕方ないわね、ここはいつたん退く事としよう……。マルコツ、ダスビダーニヤ!!」
「あつ、待つアルこのロシア人!!」

そんな風にマルコが時間を潰しているうちに、ロシア空軍ちつくだつたお母さんが窓から飛び降り、夜の森に消えて行きます。

見事偽のお母さんを追い出し、満面の笑みでスタスタ歩いてくる中華風お母さん。ですがマルコはもう我慢が出来ません。

「ウソだつ、貴方もお母さんじゃないんでしょ?」

「……えっ!? 違うアルよマルコ!? 私こそホントのお母さんアル!!」

語尾に「アル」とか付けておいて……。それでもお母さん（中華）は必死に喰らい付いてきます。

「お母さんはそんな喋り方しない!

おねえさんは僕のお母さんなんかじゃない!!」

マルコはちよつと強めの口調で中華のおねえさんを問い詰めます。

やがて静かに下を向き、お姉さんはその顔を伏せました。

「——フツ、まさかバレていたとはな」

「分かつてるよツ！ いちいちやんなくていいよツ!!」

「なんなのこの茶番！ お母さんに会わせろ!!」

そんな風にマルコに肩をガクガク揺らされますが、中華のお姉さんは「ふははは！」と笑うばかりで一向に答えてくれません。

このお姉さんも含めて、この人達はいったい誰なんでしょうか？ 謎は深まるばかりです。

「見事アル、マルコ。……まさか私を偽物と見破るとは。」

その母を想う強い気持ちに免じて、ひとつ良い事を教えるアル……」

お姉さんは懐から一枚のメモ用紙を取り出し、それをマルコに手渡します。

関係ないけれど、どれだけ自信マンマンだったんだコイツは、とマルコは思いました。

「君のお母さんは、ここには居ない……。」

本当の母に会いたくば……その紙に書かれた場所に行ってみると良いアル……」

何故か突然「ぐはっ！」と謎の吐血をし、何の脈絡もなく床に倒れ伏す中華のお姉さん。

まるで今の今まで「自分はマルコを守る為に戦っていたんだ」とでも言うかのように、

悲壮な雰囲気醸し出し始めます。

もう無理やりにもラストシーンを、なんかいい感じの演出をしようとしている事が、見て取れました。

この雰囲気から察するに……、きっと後数秒もすればお姉さんの命は尽きてしまう（という設定）なのでしよう。

そうなる前になんとかマルコに伝えようと、お姉さんは必死に最後の力を振り絞ります。

「そこにたどり着くまでには……もう数々の強敵が待ち構えているアル……」

我々など所詮、尖兵に過ぎない。油断しちや……駄目アルよ……？」

「おねえさんっ！ おねえさあーんっ!!」

今にも力尽きそうながらも、マルコに向かって必死に手を伸ばすお姉さん。その迫真の演技に呆れながらも、一応マルコもそれに合わせてあげます。非常に付き合いの良い子なのです。

「一度だけでも、『お母さん』と呼ばれてみたかった……」

「何ですかッ！ 何が貴方をそうさせるんですかッ！」

何なんですか貴方たちは！ 一体誰なんですか!! どういう世界観なんですか!!

そんなマルコの心の叫びも届かず、お姉さんの命は今にも燃え尽きようとしています。

す。

「あ、ちなみにお母さんの所までは、ここから三千里……」

「——また三千里いくのっ!? いいかげんにしてよ!!」

「ここ連れて来てよ! 今すぐお母さんに会わせてよ!!」

マルコは一生懸命に肩を揺らすも、すでにお姉さんは力尽きた後でした。

結局マルコはお姉さんにお金とチケットを用意してもらう事が出来、今度の三千里の旅は以前とは違う、非常に快適な物となるようです。

空港までは高級車で送ってもらい、飛行機のファーストクラスに乗り、マルコは快適な空の旅を堪能します。

機内では「ワインはいかがですか?」とスチュワーデスさんに聞かれましたが、マルコは未成年なので「ノーセンクス」と答えました。

かわりに沢山のお菓子を貰い、暇つぶしにと経済新聞を受け取ります。無駄に株価の動きなんかをチェックしてみます。

「待っててね、お母さん。いま会いに行くからね——」

何故かマルコの脳裏に、
“強くてニューゲーム”
という言葉が、
思い浮かびました。

お別れの時は意外と淡白な、あらいぐまラスカル。

ウエントワースの森を流れる川を、一艘いっそうのカヌーがゆつくりと進んでいきます。

乗っているのはラスカルという名のあらいぐま、そしてその飼い主であるスターリングという少年です。

彼らは今日、お別れをする為にカヌーに乗り、この森へとやって来たのでした。

「さあ、いいんだよラスカル……。行っていいんだ」

やがて森の奥深くへと到着したスターリングは、カヌーを降りてラスカルを地面に降ろします。

スターリングが指さす方向には、ラスカルとは違う一匹のあらいぐまが居ます。彼女は最近ラスカルと知り合いになったメスのあらいぐまで、きつと将来ラスカルのお嫁さんになってくれるであろう子です。

彼女がいるであろうこの場所を目指して、スターリングはやってきたのでした。

「僕らの別れる時が……。とうとう来たんだラスカル」

この度スターリングは、ここから遠く離れた場所に引越す事になりました。

進学の為に、ミルウオーキーにある姉の家へと行かなければならなくなったのです。だからラスカルとは、ここでお別れをせねばなりません。

それに加えてあらいぐまという動物は、本来はとも人に飼う事の出来る動物ではないのです。

どれだけラスカルがスターリングに懐いていても、スターリングがラスカルを愛してしようとも、一緒に暮らし続けていく事は出来ない。それは変えようのない事実でした。

何よりもう一歳となったラスカルには、そろそろお嫁さんが必要となる時期。

この森でガールフレンドと共に生活していく事こそが、ラスカルにとっても一番良い事だったのです。

そんな様々な事情から、今日スターリングはラスカルとお別れをする決心をしました。

遠くに見えるガールフレンドの姿、そして大好きなスターリングを交互に見て、ラスカルはどこか戸惑っているようでした。

「——さあ行け、行ってお前の幸せを掴め！ 行けっ！ ラスカルっ！」

目から零れようとする涙を堪え、耐え難い未練を振り払うようにして、スターリングが大きな声で促します。

それを聞いたラスカルは、やがて戸惑いながらもトコトコとガールフレンドの元へと歩いて行きました。

「さようならラスカル……。元気でやれよ。」

……ありがとう、ラスカル」

ラスカルの姿をしつかり見届けた後、スターリングは涙を拭い、カヌーへと乗り込みます。

どこかキョトンとした顔でラスカルが見つめる中……。スターリングがひとり、川を戻って行きました。

「……ラスカル、元気でな。」

お前だったらきつと大丈夫……。ってアレ？　なんか浸水してない？」

気が付くと、スターリングのおしりは水浸しでした。

そうです、いつの間にやらこのカヌーは穴が空き、今もどんどん沈んできている最中だったのです。

「……えっ。あ……。いったんラスカルの所に戻……。」

ってダメだコレ！　どんどん沈んでってるよコレ!!」

もうへゴボゴボゴー！　みたいな音を立てて、凄い勢いでスターリングのカヌーが沈んで行きます。もうとても進む事も、戻る事も出来ません。

「えっ?! あれつてワニなんじゃない?!

なんでワニ、あんなに寄つて来てるのツ!」

そうこうしている内、なにやら沈みゆくカナアの周りを、沢山のワニたちがワラワラとし始めます。

そんな元飼いの主の様子を、陸地でガールフレンドと居るラスカルが「ほけ〜」つと見つけていました。

「ちよ……、死ぬっ! 僕死んじやうよコレ!?

なんでこつち来るんだよワニツ! ワニこの野郎! ワニこの野郎!!」

スターリングはオールを武器にして応戦しますが、「カブツ!」とワニに噛まれて、オールを奪われてしまいます。

「アカン! オール取られちゃったよラスカル!!

ちよ……手え! いま手え噛まれそうだったよラスカル!

助けてくれラスカルツ!!」

そんな元飼いの主の様子を、ラスカルは陸地で「ほけ〜」つと見つめます。

「うおおおおおツ!! 死んでたまるかっ! 死んでたまるかラスカルツ!!」

ワニの鼻にパンチしたり、ワニの背に乗ってマウントパンチを繰り返したりしながら、必死こいてワニと戦うスターリング。

ワニとスターリングが入り乱れ、水面が騒がしくバシャバシャと跳ねます。

そんな光景をラスカルは、ただ「ぼけく」と見つめ続けます。

「そうかつ！ ワニの片目を殴って、その隙にそちら側に周り込めば、

僕の姿は死角となるはずだ！ ありがとうラスカル!!」

なにやら戦いの中で、対ワニの必勝法を開眼し出すスターリング。良い感じの勢いでワニを撃退していきます。

「よし！ あらかたワニを撃退し終わったぞ！ ありがとうラスカル!!」

……つて痛い！ 噛まれた!?

これはピラニア！ ピラニアに足を噛まれてしまったんだ!!

……なんでこんな所にピラニアがいるんだラスカル!? アウチツ!!

そして次はピラニアの魚群と格闘しだすスターリング。

その姿をラスカルは、ただ「ぼけく」と見つめ続けます。

「……くつ、的が小さくて狙いにくい！ しかし僕は負けないぞラスカル!!」

人間を舐めるな！ 所詮お前らは魚類!! 僕は哺乳類だ!!

ならば負ける道理など微塵も無いよなラスカル！ ぜつたいに負けないぞ!!」

こう見えて、KARATEやってるんだ。………通信教育で!!

もう千手観音のように拳を繰り出し、スターリングがピラニアを駆逐していきます。

「ピラニアは唐揚げにすると美味しいらしいぞラスカル！」

しかしそんな事言ってる場合かッ！ アホかッ！！

……僕は生きる！ 必ず生きてミルウオーキーに行くんだ！！

そう、進学をする為に！！ キャンパスライフが僕を待っているツ！！

立派な大人になるよラスカルツ！！

やがて最後のピラニアを「ほわたあー！」とチョップで弾き飛ばし、スターリングが立ち泳ぎをしながら勝利の雄たけびを上げました。

「うおおおおおー！！」という大きな声が森中に木霊し、その光景をラスカルが「ぼけ〜」っと見つめます。

「——死ぬかと思っただけど、なんとかなったツ！！！！

人間やれば出来るモンだよなラスカルツ！！

パワー トウザ ピーポー！！ パワー トウザ ピーポー！！

……それじゃあなラスカル！ その子と達者で暮らせよ！！ 幸せにおなり！！

こちらにブンブンと手を振って、スターリングがヒヤッハーと帰って行きます。

無駄に速い平泳ぎで、スイスイ川を泳いで行きました。

なにやらすぐく〴〵やりきった感〴〵のある顔を、息継ぎの度にひよこひよここと出しなが

ら——

「……………ミィ?」

ラスカルが「?」と小首を傾げます。

あの少年は何をやっていたんだらう? いったい何だったんだらう、あの少年は。ラスカルはあらいぐまなので、難しい事はよく分かりません。

だんだんと小さくなっていく少年の姿。

それをいつまでも、いつまでも見つめ続けるラスカル。

とりあえずこの森で、元気に暮らしていこうと思いました。

どんなハプニングもその強靱な想像力で乗り切つて行く、赤毛のアン。

「こんにちは、おじさま！ 迎えに来てくれて嬉しいわ！」

19世紀も終わり近づいた、ある6月の事。

プリンスエドワード島にあるブライトリバーの駅に、ひとりの赤い髪をした少女の姿がありました。

グリーンゲイブルズのマシユー・カスバートは、その女の子を見て、たいそう驚きましました。

「良かったわーっ、お目にかかれて！」

ひよつとしたら来て下さらないんじゃないかって心配になりだしたので、中々いらつしやらないワケを、アレコレと考えていた所なのっ

「もし今日お見えにならないかったら……、ほらっ！ あの白い桜の木に登って、

あの上で夜を明かそうかなって、そう思っていたのっ！

ちっとも怖くなんてないわ？ 月の光に照らされて、

白い花が沢山咲いている桜の木で眠るなんて、とっても素敵でしょう？

まるで大理石の大広間に居るような……そんな気がするんじゃないかしら？」

彼女の名はアン・シャーリー。

本日ホープタウンにある孤児院から、マシユーの家に引き取られる為にやって来た
0才の女の子です。

？せつぽちの身体、そばかすの顔、赤いおさげの髪。

しかし彼女はとても明るく、すごく愛嬌のある女の子でした。

「それに今日来て下さらなくても、

明日になればきつと迎えに来て下さるって、そう思っていたからっ。

……ああっつ。これからおじさんと一緒に住んで、

おじさんの家の子になるなんて、素敵だわあっつ」

この活発でとても良くしゃべる女の子に、マシユーは圧倒されてしまいます。

人付き合いが得意ではなく、60となるこの歳まで独身を貫いてきたマシユーにとつて、本来こうやって誰かと話すのは苦手な事であるはずでした。

……しかしこの子の話を聞いている内に、マシユーはどんどん愉快的な気持ちになっていきます。なにやらとても胸が暖かくなってくるのです。

「遅れてごめんよ。」

……さあ、そろそろ行こうかね。あちらに馬車があるから」

「まあ、あたし馬車に乗るのが大好きなの！ ドライブって素敵だわ！

ここから長い事乗って行くんでしょ？ 楽しみだわあ〜っ」

とめどなく続く、女の子の愉快なおしゃべり。

それに楽しそうに耳を傾けながら、マシユー・カスバートはグリーンゲイブルズの家に向けて、馬車を走らせていきました。

.....

「ねえおじさん！ グリーンゲイブルズの近くに小川はあるかしら？」

あたし小川の傍に住むのが、ずっと夢だったのっ！」

「あたし、孤児院は嫌い。」

……酷い所よ？ だつて空想を巡らすゆとりが無いんですもの。

なにしろ周りは、みんなみなしごばかりでしょう？

そりゃあ、隣にいる女の子が本当は立派な伯爵の娘で、

小さい頃に両親のもとから、人でなしの伯母にさらわれてしまった！

……なんて想像するのは面白いわ？

でも、それも夜だけ……。昼間はとてもそんな暇は無いの」

「だからあたし、こんなに痩せてるんだと思うわ？」

骨の上に一欠けの肉すら無いんですもの。

あたし、もし自分がぼちやぼちやと太ってて、

肘にエクボがあつたらさぞ良いだろう、なんて考えちゃうの」

まるで万華鏡のようにコロコロと変わるアンの表情。

見ているだけ、聞いているだけで愉快な心地になつてきます。

「あたし、少しおしゃべりしすぎるかしら？ おじさんは黙つてる方がいい？」

もしそう言つてくだされば、すぐにおしゃべりを止めるわつ。

決心すれば止められるの！ 骨は折れるけどね？」

「あたし、いつもみんなに『うるさくて敵わない』って言われるの。

それにみんな、あたしの言葉遣いは大げさだつて言つて笑うのよ？」

でも、大きな考えを伝えようとすれば、

自然と言葉遣いだつて大きくなつてしまふわよね？」

美しい湖、豊かな自然の木々の中を、二人の乗る馬車が駆けて行きます。

マシューはアンの話に相づちを打ちながら、楽しそうに話を聞きます。

「あたし今、完全に近いくらい幸せよ？」

でもね？ 完全に 〃とはいかないの……。

だって、あたしの髪の毛は赤い色をしているんだもの。

……これであたしが何故完全に幸せでないか、おじさんもわかったでしょう？」

「あたし、自分が？ せつぽちな事や、そばかすの事なんて気にしないわ？」

そんなのは、想像で忘れてしまえるもの！

肌はバラ色で、目は美しいすみれ色なんだよって思いこめるわ？」

「……でも、赤い髪はダメ……。」

あたしの髪は黒なんだ、カラスの濡れ羽のように艶やかならだって、

そう想像してはみるんだけど……。

でもやっぱり赤い色は消えてくれないので、胸が張り裂けそうになるの。

きつと一生ついてまわる悲しみなのでしようね……。

いつか本で「一生悲しみ続ける女の子の話」を読んだけど、

その子の髪は赤色じゃなかったわ。混じり気のない金色だったもの」

自らのコンプレックスを想い、少しでも言葉に力が無くなるアン。

しかし、やがて目の前に白い林檎並木が見えてきた途端、アンは花のような笑顔を浮

かべました。

「まあ！ カスバートさんっ！ カスバートさーん!!」

大声でマシユーの名を呼び、アンは周り一面に広がる美しい光景に感嘆の声を上げま

す。

そこはまるで、物語に出てくる風景のよう。今にも妖精が飛び出してきそうな美しい風景に、アンは言葉を無くして見惚れてしまいます。

まるで自分がお姫様に、花の女王さまになったかのような心地でした――

「……ねえカスバートさんっ！ さっきの白い所はなんて言うの？」

「んんん？ そうさのうゝ、さっきの林檎並木の事かな？」

あれは、ちよつと綺麗な所だが」

「まあ！ とても 綺麗 じゃピッタリしないわっ！

美しい でもダメね。どちらも言い足りないわっ。

ああ……素晴らしかったわあゝ。胸がジーンと痛くなつたの……！

あたし芯から美しい物を観ると、いつもそうなるのっ！

でもあんな素晴らしい所を、ただの林檎並木なんて呼ぶのは……」

この感動を言い表す言葉は無いものか、そうアンはうんうんと悩みます。

「……そうだわっ！ 喜びの白い道 づっていうのはどうかしら！」

空想的な良い名前でしょうっ？

あたし場所とか物の名前が気に入らないと、

いつも自分で新しい名前を付けて、そう思い込む事してるの！

今度からおじさんも「喜びの白い道」って呼んでねっ！」

マシユーは戸惑いながらも「そうさのう」とアンに返します。

この少女はなんと想像力が豊かで、面白い子なのだろう——

まだ会ったばかりだというのに、マシユーの胸にはアンへの愛しさが、暖かく灯つていました。

「もうじきグリーンゲイブルズに着いてしまうの？」

ああ……嬉しいような悲しいような、そんな気がするわっ。

だってこのドライブ、とっても楽しかったんですものっ！

あたし楽しい事がお終いになる時って、

なんだかとっても悲しい気持ちになるの」

「その後で、もくつと楽しい事が待っているかもしれないけれど、

それが大抵そうでない事が多いのよ？ あたしの経験ではねっ」

「でもいよいよ自分の家に着くんだと思うと、とっても嬉しいわ！

これから新しい生活が待っているんだと思うと、

また胸がジーンと痛くなってくるわ……！」

そう心から喜ぶアンの見つめながら、マシユーは馬車を走らせて行きます。

実はマシユーの心も、今とても痛んでいました。

何故ならばグリーンゲイブルズに着いてしまえば……今幸せそうに微笑んでいるこの子に、本当の事を伝えなければならぬからです。

実はアンがこのプリンスエドワード島にやってきたのは、*「手違い」*からだったのです。

アンはマシユーの家に引き取られる為に、そう言われてここへとやって来たのですが……、それは大人たちのしてしまつた手違い。

本当はマシユーの家は、*「野良仕事を手伝つてもらえるように」*と、10才くらいの男の子を寄越して貰えるよう、孤児院に頼んでいたのでした。

人づてに頼んだのがいけなかつたのか、何故ちゃんとならぬと伝わらずにアンがやってきてしまつたのか、それは今は分かりません。

でもグリーンゲイブルズに帰れば、家で待つている自身の妹マリラに事情を話し、それをアン本人にも伝えなければならぬ……。

今も新しい生活に想いを馳せて、こんなにも幸せな顔を見せているこの子に、本当の事を伝えなければならぬなりません。

「これは手違いなんだ」「お前はここでは暮らせないんだよ」と、そう言わなければなりません。

その残酷さを想い、マシユーの心は重く沈んでいきます。

マシユーはもう、この子の事がとても好きになっていました。

短い時間ながらアンの明るさに触れ、豊かな人間性を知り、なんと素晴らしい子なのだろうと驚嘆していたのです。

だから「手違いだったんだ」などと、とても自分の口から言い出す事なんて出来ませんでした。そんな可哀想な事を、どうして自分がこの子に出来るでしょうか？

マシユー・カスバートはどうする事も出来ないまま、ただただ我が家であるグリーンゲイブルズに馬車を走らせる事しか、出来なかったのです。

「まあー、あの家がグリーンゲイブルズねっ！」

あたし今日から、この木々に囲まれた美しい所で暮らすんだわっ！」

馬車から身を乗り出して、アンが嬉しそうに声を上げます。

それを直視する事が出来ず、マシユーは項垂れてしまいました。

「でもおかしいわ？ 何かしらあの山のように大きな怪獣は？」

あたしあんなの、本の中でしか読んだ事ないわ？」

アンの言葉に、思わず視線を上げるマシユー・カスバート。

我が家であるグリーンゲイブルズの後ろに、いま巨大な生物がへドツシン！ ドツシ

ン！と歩いているのが見えました。

「まあ素敵っ！ グリーンゲイブルズにはこんな生き物がいるのねっ。

不思議の国のアリスにだって、こんな巨大なクリーチャーは出てこなかったわ！

プリンスエドワード島って凄いい所ね！」

——そんなワケあるか。マシユーだってこんなモン初めて見たのです。

もう山を「よっこいせ」と跨がんばかりの巨大生物が、グリーンゲイブルズに襲来しています。

プリンスエドワード島に今、最大の危機が訪れました。

「両足で立っているけど、顔や尻尾はまるでトカゲみたいねっ！

でも色は黒くて、とっても強そうだわ！

ねえマシユー？ 今日からあの怪物の事を「ゴジ〇」って呼ばないっ？

とっても空想的で良い名前でしょう？」

アンは嬉しそうにそうはしやぎますが、マシユーはもうアワアワとうろたえています。

今にもあの巨大生物が「アンギャー！」と光線でも吐かないかと、不安でたまりません。

「あら？ 向こうからもう一体やってきたわ！」

……あれは何かしら？　ゴ○ラと同じでも大きいけれど、
身体は銀色をしているわね……。

それにとつても固そうな身体に見えるわっ！」

なんやかんやと言っている内に、もう一体の巨大生物がこの場に現れました。

家々を「ギャース！」と踏み潰して回るゴジ○に対して、悠然と立ち向かつて行きま
す。

「……そうだわっ！　今日からあれの事を『メカゴ○ラ』って呼ばない？」

あの○ジラと瓜二つだし、それにとつても空想的な名前でしょうっ？」

アンは馬車から身を乗り出して喜びますが、マシユーはもうそれどころではありませ
ん。今も目線の遙か先では、二体の巨大怪物がボカスカと殴り合っているのです。

「あっ……！　メカ○ジラが負けてしまったわマシユー……」

とつても強そうだったのに、やっぱりメカつて耐久度に難があるのかしら？」

やがてゴジ○にドツゴンとぶん殴られ、メカゴ○ラは機能を停止してしまします。

所詮は人の作りし物、ゴジ○という超自然災害に立ち向かうには、まだまだ力が足ら
なかつたのです。

「見てっ！　今度は蝶のような巨大生物もゴ○ラに向かつていくわっ！」

あれは鱗粉なのかしら？　効いてる！　ゴジ○に効いてるわよマシユー！！

ねえ、今日からアレの事を「モス〇」って呼ぶ事にしない？

とっても空想的で良いと思うのっ！」

何でも空想的にすんな！

マシユーもそろそろ「ただで万能なワードなんじゃ」と言いそうになりましたが、子供相手なのでグツとこらえます。

マシユーはとっても温厚な男なのです。

「……ああつ！ モ〇ラが逃げ帰っていくわマシユー！」

とても善戦したけれど、やはりまだゴジ〇には敵わなかったのよ！

今日からゴ〇ラの事、「怪獣王」って呼ぶ事にしない？」

〇ジラにぶん殴られ、モ〇ラが「えーん！」と逃げ去って行きます。

それを追いかけていく小人の女性の姿を発見したアンは、「妖精だ！」と言って大変なナンシオンが上がりました。

しかしマシユーはもう、それどころではありません。

「でも困ったわ。モス〇もメカ〇ジラもやられてしまうなんて。

あの怪獣王からは、自然を破壊する人間たちへの怒りを感じる気がするの。きっとあの破壊行為も、傲慢になってしまった人間たちへの警告なのよ。

……私たちは今一度、よく考えてみなくてはいけないわ……」

とんでもない想像力、とんでもない理解力——

赤毛の少女アン・シャーリーの頭脳は今、冴えに冴えわたっていました。

「でもきつと大丈夫だわっ！」

だってプリンスエドワード島の人々は、

こういう事態に慣れてるんでしょ？

きつとゴジ○なんて、簡単にやつつけてしまえる力を持つてるんだわっ！」

アンはウキウキしながらそう言いますが、そんなワケあるかいとマシュー・カスバートは思います。

その後もウルトラ○ンだの、ゴッドマ○だの、レッドマ○だのというデッカイ人達（アン命名）がこの場に駆け付けましたが、誰もゴジ○に勝つ事が出来ません。

やはり怪獣王を倒す事は出来ないのか!? プリンスエドワード島の運命は!? アンとマシューは不安な気持ちになります。

しかしその時——突然グリーンゲイブルズの家から、マリラ・カスバートが飛び出して来ました。

「ああマリラさん！ あの人がおじさんの妹、マリラおばさんね!？」

おばさんがなにやら、天に向かって両腕を広げているわ!」

後にアンの母親となる人、マリラおばさん。

その彼女がバツと両腕を上げると、なにやらその身体がへピカピカツ!!と発光し出します。

そしてゴジラの上にへドゴーン!と雷が落ちました。

「サンダー!? あれはサンダーの魔法ねっ!!」

あの破壊力から察するに、もしかしたらサンダガ的なヤツかもしれないわっ!」

突然マリラが放った雷魔法。

「9999」というダメージ表示が見えたかと思えば、ゴジラの身体がへバシューン!と霧のように消えていきました。

「すごいわマリラおばさん! 一撃でゴジラを倒しちゃうなんて!」

きつとおばさんは、高名な魔導士に違いないわっ!」

どこからともなくへペペペペー ペー ペツペペー♪というファンファーレが鳴り、マリラに膨大な量の経験値が入ります。

力がアップ! かしこさがアップ! 素早さがアップ!

その度にマリラは片足を上げて、喜びを表現しました。ロマンシングなサガです。「マリラおばさんって、とっても強いのねっ。」

きつとグリーンゲイブルズに住む人たちは、みんなこんな風なんだわっ。素敵ねっ!」ワシや腰が痛くて畑仕事も出来んのじゃが……。

自分は決してあんな風じゃないと伝えようとするも、アンのテンションはもうMAXです。話を聞いてくれません。

それにしても、いつのまにマリラは魔法を？ わしのグリーンゲイブルズ、ちよつと見ない内につたいどうなって……。

マシユーの頭はもう、疑問で一杯になりました。

そんな事をしている内に——突然空から、一筋の光が差し込んできました。

「あつ！ あの花の中に何かいるわつ！」

ゆつくりと地上に降りてくるの！ あれは天使さまかしら？」

空から神々しく差し込む光。それと共に地上へと降りてくる、巨大で醜悪な化け物。

まるで7人の男女の身体を肉塊と合体させたような、そんな見た事もない姿をしています。

「今あの化け物、『逃がさん。お前だけは……』って言ったわ！」

あたし確かに聞いたのっ！」

その化け物はへゴゴゴゴ……！と降り立ち、まるでラスボスのようにマリラの前に表れます。

まるでマリラを亡き者にしようと、マリラとの因縁に決着をつけようともしているかのようです。

「いったい何の因縁なのでしょう？」

「思い付いたんだけど、あの化け物の事を『七英雄』って呼ぶ事にしない？」

「きつとあの人達は一度は世界を救ったものの、その後人々に疎まれたり、

裏切られたりして、どこか異次元にでも飛ばされてしまったのねっ！」

「その憎しみや悲しみによって、あのような異形の姿になってしまったのよ！」

「ねっ？ とつても空想的でしょう？」

「アンの想像力が冴えわたります。」

「グリーンゲイブルズには色んな生き物たちがいるのねー」と、アンはご満悦です。

「マシユーは戦わないの？」

「いくら七英雄が一体とはいえ、おばさん一人では流石に厳しいわよっ。」

「ほらっ、ここにちようど『バイキング』が使いそうな両刃の斧があるわっ！」

「これで一緒に戦いましょうっ！」

「アンは即座に馬車を飛び出し、まるで『自分のターンだ！』と言わんばかりにホワ

チャーと片足を上げます。

「アンは自らの剣技に『乱れ雪花』という名前を付けました。」

「何でこんな物が馬車にあつたのかは分かりませんが、もうやけくそになったマシユー

も両刃の斧を持ってアンに追従します。」

マシユーの愛したグリーンゲイブルズは、もう二度と戻ってこないのだと思いましたが。

……やがてアンたち三人の他にも、近所に住むレイチエル・リンド夫人、農場手伝いのジェフリー、そして後にアンの心の友となる少女ダイアナもタタタつと家から飛び出してきて、みんなで七英雄と対峙します。

順番にクイツと片足を上げ、行動を選択していきます。

時は19世紀末。突如このプリンスエドワード島を襲った、未曾有の危機——
世界の平和を賭けた最後の戦いの火蓋が今、切つて落とされました。

「異次元に叩き返してやるわッ!!」

……あ、ねえおじさん？ もし〃時間を一時的に止める技〃とかがあれば、たとえ七英雄だつて楽に倒せるんじゃないかしら？

もしそういうの出来たら、それを〃クイツクタイム〃つて呼ぶ事にしない？
とつても空想的な名前だと思ふわっ!」

感受性が豊かで、おしゃべり。

そしてつらい事や悲しい事も、得意の想像力で喜びに変えていく——

52 どんなハプニングもその強靱な想像力で乗り切っていく、赤毛のアン。

赤毛のアンは、そんな魅力的な女の子なのです。

隕石が落ちてきて世界が滅んだらいいのに、と思う小公女セーラ

「そうなんですよ、お嬢様〜！ それでね？ その時の院長先生ったら〜！」

「うふふ♪ まあベツキーったら♪」

ここはイギリスにある寄宿学校、"ミンチン女子学園"の屋根裏部屋。

セーラ・クルーとベツキーは、二人で楽しくおしゃべりに興じておりました。

「もうメガネは粉碎するわ、半月板は損傷するわで大変だったんですからっ！」

「ぜひセーラお嬢様にもお見せしたかったですっ」

「まあ可笑しい♪ ベツキーって、とつてもお話が上手なのね♪」

セーラは大富豪の娘として、元々はこのミンチン学園に特別寄宿生として入学して来ました。

持前の優しさと聡明さからすぐに皆の人気者となり、学園代表生徒を務める程の凄い女の子だったのです。

しかしセーラの11歳のお誕生会の最中、突然父が熱病で亡くなってしまった事、そ

して家が破産してしまった事を知らされず。

それにより学園を辞めさせられ、また身寄りを無くしてしまったセーラは、ここミンチン学園でベツキーと同じ「使用人」として働く事となったのでした。

「うふふ♪ これからベツキーの事、お笑い核弾頭って呼んでいいかしら?」

「いいですともお嬢様! 私の持ちネタは2兆個ありますからねっ。」

いつでもお聞かせしますよっ」

仕事は辛いし、悲しい事も沢山あるけれど、それでもセーラは日々笑顔を忘れません。

友達であり、良き理解者でもあるベツキーと共に、この過酷な境遇にも決して挫ける事無く、懸命に過ごしておりました。

「セーラ! セーラ・クルーはいるっ!?!」

「あっ……ラビニアお嬢様っ……」

その時、(バンツ!)と部屋の扉が開き、この学園の生徒の一人である「ラビニア・ハーバート」が現れます。

彼女はプライドが高く、とても傲慢な所のある娘で、いつもセーラに対してイジワルな事をするのです。

「こんな所にいたのねセーラ! さあ! 私と一緒にいらっしやい!」

「えっ、ラビニアお嬢様……? 私に何かご用でしょうか……?」

「いいから来なさいっ！ ほら、さっさとするっ！ ほらっ!!」

「……お嬢様っ!? お嬢様あああーっ!!」

突然の出来事にベツキーはうろたえ、必死に追いつがろうとします。

しかしセーラは無理やり手を引かれ、どこかへ連れ去られてしまいました。

.....

「さあセーラ!! ここに 〴〵熱々のおでん 〴〵を用意したわっ！

これを60秒以内に完食なさいっ！」

「えっ!？」

今セーラの目の前には、マグマのように煮えたぎっているお鍋がありました。

机の上にはお箸と小鉢が用意されているのも見えます。お好みでからしなんかを入れても良いかもです。

「さあセーラ・クルー！」

きつと貴方がお腹を空かせていると思つて用意したのよっ！

昆布で出汗を取り、素材を厳選し、2時間コトコト煮込んだのよっ！

まさか貴方、私が作った物が食べられないって言うんじゃないでしょうねっ!？」

ラビニアは高圧的にセーラに詰め寄ります。

アルハラなんて目じゃない程の仕打ちが、セーラを待ち受けていたのです。

「そしてそこっ！ その机の横には、熱湯の入ったお風呂を準備させたわっ！

この熱湯風呂に入りながら、熱々のおでんを食べるのよセーラ!!」

「そんなっ!!? そんな事っ…!」

ラビニアの言う通り、この部屋には何故か熱湯風呂までが用意されていました。今もモクモクと湯気が立ち登り、とても人の入れる温度では無いようです。

これに入れるのはきつと、一部の特殊な訓練を受けた人間だけです。

「それに加えて、これっ！ ここの床一面に、

バラエティー番組でお馴染み『足つぼシート』を敷き詰めておいたわっ！

足つぼの激痛に耐えながら歩き、

そしてドボンと熱湯風呂に入って熱々おでんを食べるのよセーラ!!」

「そ……!!? そんな事私!」

「もちろん歩く前には、このバットに額をつけて、10回周ってもらおうわ!」

平衡感覚を失った状態で足つぼマットの上を歩き、

そして熱湯風呂に入って、おでんを食べなさいっ!」

なにやら色々混ざっていますが、そんな身体を張る系の芸人さんみたいな事、セーラ

はやった事がありません。しかし時は無常に進んでいくのです。

「さあ行くわよセーラ！ 準備はいいわねっ!？」

「えっ……!?!? ちよ……まつ!？」

今セーラにバットが手渡され、ラビニアはストップウオッチを構えます。

「よーいつ! ……………スタートツツ!!!」

ラビニア嬢の号令の下、その場でぐるぐる回り始めるセーラ。

突然の事に未だ戸惑いながらも、その身体は即座に動いてくれます。セーラはデキる子です。

「いーちー! にいーい! さあーん! ……その調子よセーラ!!」

「——ツツ!! ——ツツ!!」

竜巻のような勢いでぐるぐる回り、身体能力の高さを見せつけるセーラ。あつという間に十回を回り終え、熱湯風呂の方へ向かって歩きます。

さすがは元、学院代表生徒です。

「さあ次は足つぼシートゾーンよ!! 歩きなさいセーラ! 歩くのよっ!!」

「……いゝ、いッ! おっ!! 痛あッ! いゝ、いいいだッ!!」

フラフラと左右に揺れながら、セーラが足つぼシートを歩いて行きます。

額に嫌な汗を流し、苦悶の表情を見せながら、えっちらおっちら歩きます。

まるで生まれたての小鹿のようになりながら、懸命に足つぼゾーンを踏破していきました。

余談になりますがセーラの声は、風の谷のナウ○カヤカリオ○トロの城のクラ○スト一緒に声優さんです。

その愛らしく儂げな声で今「痛あッ！ い、いたいッ！」とか叫んでいるのです。いろいろ台無しでした。

「よしおっけい！ そこを抜ければ次は熱湯風呂よ！

さあ飛び込むのセーラ！ 飛び込みなさいッ！」

足つぼゾーンを終えたセーラを待っていたのは、今も湯気の立ち上る熱湯風呂。

セーラ・クルーはおっかなびっくり、お風呂に足をかけます。

「お……押さないでねっ？ ぜったい押さないで下さいねっ?!」

入るのを恐れるように、踏ん切りが着かないと言うように、セーラがお風呂の上で制止します。

そしてラビニアに対して、念入りに念入りに「押すなよ!! 絶対押すなよ!?!」と確認しました。

これは絶対にやっておかなければならない「儀式」。世界共通のお約束なのです。

「——あ、ごめんあそばせ」

「!? あっつつつ!!」

その信頼に答えるよう、もちろんラビニアはセーラを突き落とします。

セーラはまるでお手本のように、頭からくザバン!>と熱湯風呂に落ちました。出川さんもニッコリです。

「あああーっつい!! あああああーっついッツ!!」

「さあセーラ! おでんよ! そこからおでんにいくのよ!!」

風呂から飛び出そうとするセーラを宥めながら、ラビニアはおでんを差し出します。

まずは熱々のたまごからセーラの口に持っていきます。ラビニアは非常に「わかっている」女の子でした。

「熱ツ!! ちよ……バカツ! あっつつつ!!」

これホントあっつつつ!! リアルガチなのっ!!」

ほっぺにピタツと付けた瞬間、烈火のように暴れ狂うセーラ。

それでも果敢にたまごを食べようとしては落とし、食べようとしては落とし。必死こいておでんと格闘します。

非常にナイスなリアクション。上島さんもニッコリです。

「いいわセーラ!! 輝いてるっ! 貴方いま輝いているわっ!!」

「し……死ぬっ！ おでんで死んでしまっ！！

でも私負けないっ……。どんな不幸にも決して屈したりしないわっ！

——私の心を、折ってごらんなきいッッ！！！！

……その後見事におでんを完食してみせたセーラは、真つ赤な顔で「殺す気かッ！」と叫んだり、クワガタに鼻を挟まれてみたり、ベツキーとゴボウでしばき合ったりしました。

最後はラビニアも一緒に熱湯風呂に引きずり込んでみたりして、女の子同士「キヤッキヤッ」と仲良く遊びます。

小公女セーラの心を折る事は、決して出来ないのです——

「いいことベツキー？」

リアクション芸にとつて、鼻水つていうのは「ダイヤモンド」よ」

セーラはそう熱弁し、リアクション芸のなんたるかを熱く語りました。

余談になりますが、後にセーラはダイヤモンドプリンセスと呼ばれる事となります。

この時の会話が原因だったのかは定かではありません。

やがて夜も更けて寝る時間となり、部屋で一人きりになった時……、セーラ・クルーはふと我に返ります。

「隕石が落ちてきて、世界滅んだらいいのに——」

ほんのちよつとだけ、思ってしまったのです。

「ハイジ?! ハイジッ?!」

ハイジは天を仰いでわんわん泣きながら、スカートのポケットからなにやら「リモコン」のような物を取り出します。

そしてそこら中に涙をまき散らしながらも、力強くグイッとスイッチを入れました。

「メカクララ、発進ッ!!」

ハイジの声と共に、後方にあつたアルムの小屋の屋根が突然へゴゴゴッ!〜と開き、そこから何かロケットのようなものが発射されてます。

青いメタリックなボディ。

頭部に装着された赤いリボン。

今も炎を吹き出している背中のバーニア。

まるで鉄○28号のような「しやきーん!」って感じのポーズで飛ぶそれは、やがてぐるっと空を一周した後、ゴゴゴツと音を立てながらクララの前に降り立ったのです――

クララ vs メカクララ

劇場版 アルプスの少女ハイジ

「!??!?!?
」

「どゆクララ? これが我がアルムの山研究所の技術の粋を集めて開発した、

いつまでも立とうとしない悪い子おしおき用ロボ! その名もメカクララよ!」

さっきまでの涙はどこへやら。ハイジは勝ち誇った顔で高笑いをしています。

それに対して、クララは口を「アンガー!」と開けて、目の前の巨大なロボットを見上げるばかり。

これこそはハイジの最終兵器、対クララ用ロボット”メカ・クララ”です。人間などアリのように潰せます。

いつまで経っても甘ったれた事を言い、いっこうに車いすから立とうとしない小娘もまた然りです。

「——さあいくわよクララ! メカクララ、前進!」

メカ・クララは「ガッキーン!」とカッコいいポーズをとった後、ドシンドシんと

音を立ててクララに迫っていきます。

アルムの山は地響きに揺れ、鳥たちが「やばいやばい」とパタパタ飛び立っています。

「あゝはっはっは！ さあ逃げなさいクララ！ 逃げまどいなさい!!」

このメカ・クララの前にひれ伏しなさい！」

「ハイジ?! ハイジ!!」

クララは即座にレバーを操作し、車椅子の後部から「ガッシャーン!」とジェットエンジンを出現させます。

そして今まさにメカ・クララに踏みつぶされようとしたその瞬間、間髪でその場を脱出しました。

「無駄よクララ！ このメカ・クララは時速400kmでガチ走りが出るの！」

いつまでも歩こうとしないクララと違ってね！」

「ハイジイイイー……ッツ!!!!」

クララの子椅子がジェットを噴出して駆けて行きます。ドシンドシンと踏み潰そうとするメカ・クララの脚を、ドリフトを駆使した蛇行運転で紙一重に躲しながら、アルムの山を駆け抜けて行きます。物凄いスピードです。

「潰れちゃえ！ クララなんか踏んづけられちゃえば良いわ！」

支配階級の小娘め！ 民草の怒りを思い知れ！

パワー トウ ザ ピーポー！ パワー トウ ザ ピーポー！

「ハイジツ?! ハイジツ!!!」

ゴッスンゴッスンと容赦なく振り下ろされるメカ・クララの大きな足。その度にクララのマシンは1メートルも地面から飛び上がり、大きくバウンドします。

その圧倒的な巨体、圧倒的なパワーの前には、いかにクララの家が市民達から搾取して得たお金で作った最新の車椅子と言えども、太刀打ち出来ません。

もう傍から見ていると、今にもクララはメカ・クララに踏んづけられてしまいそう。その圧倒的な破壊力に捕まってしまうのは時間の問題に思えます。

「た……助けて！ 助けてちょうだいハイジ！」

「ん？ なにクララ、たすけてほしいの？」

もう汗水をたらし必死こいて逃げながら、クララはハイジに懇願します。お慈悲を下さいとツ！

「ええ！ 助けてちょうだいハイジ！ どうか命ばかりは！」

「ふっふくん。そっか、たすけて欲しいんだクララは」

ハイジはクツクツクと悪者のように笑い、ズバツと言いつちまします。

「——ならば鳴けッ！ 豚のようにブーブーと鳴いてみる!!
鳴きなさいクララ!!」

?!?!
」

ハイジのよく通る声が、アルムの山に響き渡ります——

「さあどうしたのクララ?! 鳴くのよ!!」

豚のように惨めに鳴いてみなさい!!」

もうあの優しかったハイジはどこにもいません。いま目の前にいるのは天真爛漫だった幼い少女ではなく、その支配階級への憎悪に身を焦がし、復讐の鬼と化した憐れな女なのです。

「ほ……本当につ?! 本当にそれで許してくれるの?!」

「当たり前じゃないクララ。わたし達はこんなにもなかよし。ズツ友でしょ?」

「そ……それじゃあ……!!」

クララは風前の灯火となつてしまった我が身惜しさに、頑張つてドリフト走行をしながらも必死に声を上げます。

「ぶ、ブウブウ! ブーブー!!」

「あつはっは! 鳴いた! クララが豚のように鳴いたわあ〜♪」

ハイジは楽しそうにそれを見届けた後、「よいしょ」つとばかりに手元のボタンを押し込みます。

「——豚は死ねえええ——ツツツ!!」

「いやあああああ——ツツツ!! ハイジイイイ——ツツツ!!」

メカ・クララの身体中から、もうとてつもない数のロケットが発射されます。

それはクララを目掛けて飛ぶばかりか、もう山だの川だのというところ中を破壊していきます。

辺り一帯にへドゴン!〜とかへバコーン!〜みたいな音が響きます。

「あつ、ペーター!」

「あんな所にペーターがいるわ!」

ふと二人が前を見ると、そこにはヤギ達の散歩から帰ってきたペーターの姿。

呑気に草笛を吹きながら「♪」と歩いている彼を余所に、即座に危険を察知したヤギ達が彼の傍から離れていきます。

「うぎやあああああ——ツツツ!!」

ロケットが至近距離で炸裂し、天高く飛ばされていくペーター。

ヤギ達はメーメーとお家に向かって走って行きました。彼をその場に置いて。

「ひどい! なんてひどい事するのクララ!

もうクララの髪の毛一本すら、この世には残さないわ！」

「待つて！ 違うのハイジ！ 聞いて！」

メカ・クララの拳が、地面に向けてゴツスンゴツスンと繰り出されます。それを必死こいて躲すクララ。イニシャルDもかくやという車椅子さばきです。

「みんな！ みんな壊れてしまえば良いのよ！」

資本家なんかがいるから、私たち労働者はいつまでも貧しいままなの！

共産主義こそが世界のあるべき姿なのよ！ 全部ぶつ壊してやる！」

「落ち着いて頂戴ハイジ！ 話をきいて!!」

もうハイジがマルクス主義みたいな事を言い出しています。

ペーターという友を失い、悲しみに暮れるハイジ、もう彼女の暴走を止める者は誰もおりません。

クララやアルムの山どころか、えも知れぬ憤怒によつてその身すらも焼き尽くそうとしているのです。

いま自ら破滅の道を歩もうとしている大切なともだちに向かって、クララはその弱い身体に鞭を打ち、必死に語り掛けます。

ハイジ、優しい貴方に戻つて。いつものように明るい笑顔をを見せて頂戴——

そしてついでに、共産主義などまやかしよと。優しく語り掛けます。

『——お嬢様！ ご無事ですかお嬢様!?!』

「ハッ！ ロッテンマイヤーさん?!」

その時、クララのマシンに備え付けられていた無線機から、クララの家の人であるロッテンマイヤー夫人からの通信が入りました。

「よし、ロッテンマイヤーさん、ハイジを助けたいの。

テンド○ビウムをこちらに向かわせて頂戴」

『御意。お嬢さまのお心のままに』

そして即座にこちらにやってくる、ロッテンマイヤーさん操る巨大な宇宙船のような機体、テンド○ビウム。

クララの車椅子がへしゃキーン！と翼を広げ、テンド○ビウムに向けて空へと舞い上がります。

「よし、オーキスを射出して。

K u l l a l a - L i n k S y s t e m でドッキングよ。タイミングはこちらに合わせて頂戴」

『ラジャー!』

テンド○ビウムの空いた前面から二本のビームのような物が発射され、それを目印にして、クララの車椅子がテンド○ビウムとドッキングします。

「ああ……メカ・クララ……わたしのメカクララが……」

ポトリとリモコンを落とし、そのまま地面にガツクリと両膝をつくハイジ。

今そんな彼女の眼前に、パラシユートでこの場に帰還したクララがフワツと降り立ちました。

「ああハイジ！ 大丈夫？ しつかり！」

「えへへ。わたしは平気よクララ♪ ありがとう♪」

スタツと華麗に着地したクララは、その足でテテテとハイジのもとに駆け寄ります。そして優しくその肩を支え、立ち上がらせてやりました。

「あくあ、まけちゃった。今度こそクララに勝てると思ったんだけどなあ。」

おしかつたなあ。」

「うふふ♪ 流石に私もちよつぱり焦っちゃったわ♪」

でも楽しかった——また勝負しましょうハイジ」

二人は仲良く肩を並べ、今も巨大なキノコ雲が上がっている大空を見つめます。

それは夕焼けと相まって、とても心が震えるような美しい光景でした。

関係の無い事なのですが、あれに乗っていたロツテンマイヤーさんはいったいどうなったのでしょうか？ 二人は気にしませんでした。

「あれ？ クララ車椅子は？ クララ普通に立つ

」——さあお家まで競争よハイジ！ つかまえてごらんささ〜い♪」

「あ、まっつてよクララ！ ずるい！ まっつてたらあ〜！」

「あははは♪ ほくらハイジ！ 私はここよ♪ 早くいらっしや〜い♪」

そうしてハイジとクララの二人は、まるで波打ち際で追いかけてつこをする恋人たちのように遊びながら、おじいさんの待つアルムのお家へと帰って行きました。

今日のぼんごはんは、チーズの乗ったパンとミルク。

むしろ「今日もチーズの乗ったパンとミルク」といった感じですが、ハイジもクララも何の文句もありません。贅沢は敵なのです。

やがてお腹いっぱいになった二人は、仲良く一緒に干し草のベッドに入り、手を繋いで眠りへと入ります。

明日はどんな事をしようかな？ そう二人で楽しく語らいながら。

「ねえクララ？ さつきダツシユしてなかった？」

「ううん、ダツシユしてないわ？」

明日もいっぱい、仲良く遊ぼうね——
そう約束を交わし、眠りに落ちていくのでした。

おまけ。その2

「立ちなさいよおおクララ！ 立ちなさいってばあ〜！」

アルムの高原に「ふんぬぬぬ……！」みたいなハイジの声が響きます。

「嫌よ！ わたし立ったりりなんかしないわ！ 立ちたくないのよハイジ！」

なんとか立たせようと、必死に手を引っ張るハイジ。そうはさせるかとクララは抵抗します。

「なんで立たないのよおおクララあ〜……！」 ふんぎぎぎぎ……！」

「ハイジ！ わたし立ちたくないの！ ふんぎぎぎぎ……！」

ハイジに両手を引っ張られますが、クララは両足で「ガツシリ〜」と柱にしがみつぎ、これっぽっちも放す気配はありません。クララはまるで鯉のぼりみたいに宙に浮いています。立ちたくないのです。

「凄い筋力じゃないのクララ！ 足だけで全体重を支えてるわ！」

どうしてそんなに立ちたくないの!? メチャメチャ必死じゃないの!」

「駄目よハイジ！ わたし立てないの！」

ハイジの言うように、歩けるようになってならないんだわ!」

「ウソよ! そんな身体能力があるのに、立てないワケないもん!」

こんな鯉のぼりみたいになる方が、ぜったい難しいにきまつてるわ!」

「違うわハイジ! これは私の『立ちたくない』という強い想いが力となって、

この身を支えているの! 心と体を奮い起こしているのよつ!!

言うなればこれは『火事場の馬鹿力』というヤツなんだわ!」

「そんなパワー出しちゃうくらい立ちたくないのつ?!

なんでそこまでするのよクララ! もう立つちやえばいいじゃない!!」

「嫌よ! 私立たないわ! ぜったいに嫌ッ!」

立てだなんて、そんな酷い事言わないで頂戴!」

クララはまるでウルトラマンのようなポーズで浮いたまま、必死に懇願します。

——立ちたくない! 立ちたくないでござる!!

まるで立ったら死ぬとでも言うかように、クララは泣き叫びます。

いくらハイジに「おーえす! おーえす!」と引つ張られても、ビクともしません。凄

まじい筋力なのです。

「なにが酷いのよ! 立ってって言うだけじゃない!

バカ! 弱虫! 淫乱! 黒乳首! 資本主義ツ!!

どうして出来ないのよっ！ そんなんじや一生立てないわ！
このうんこクララ！」

「嫌っ！ わたし立ちたくない！ 一生ハイジに甲斐甲斐しくお世話されて、
ドロドロに甘やかされて生きていくのよ！」

「ふざけんじやないわよ！ この便所コオロギ!!」

あんたなんか共産主義政権下だったら、まっさきに淘汰される存在なんだからね！
いいからさっさとしなさいよ！ 腐れクララ！

耳引きちぎってヤギに食わせるわよっ!?!」

「嫌よ！ わたし立たないのハイジ！」

ぜったいに立ったりなりなんかしないわ!! 我が矜持に懸けて!!」

なんの誇りなのかはよく分かりませんが、どれだけ説得しようとも、まったく立つ気が無い事は分かります。

そんなクララの情けない姿に、大切な友達の姿に……ハイジは怒りを覚えたのです。

「——ファック!! ブチ殺すぞ小娘コリメタツ!!」

いいわよ！ 今日とはとことんやってやるわよクララ！ ファツキユメエエエン!!」

ハイジは激怒しました。

この支配階級の甘ったれた小便ガキに、怒りの鉄槌を下さねばならぬと思いました。はらわたを全部掴み出して、畑の肥料にしてやるのです。

クララの墓にツバを吐いてやるのです。

「さあ行くわよクララ！ 覚悟なさい！ あんたに死のジルバを踊らせてやるわ！」
「えっ、どこへ行くのハイジ？ もう綱引きはおしまい？」

ハイジはクララを車椅子に乗せ、よいしょよいしょと連行していきます。

関係ないけれど、綱引きごっこが終わってしまった事に、ちよつと残念そうな顔のクララなのでした。

アルプスの少女ハイジ 外伝

さらばハイジ！ 乙女の涙は一度だけ!! の巻

「——ぎゃああああああああああつっつっ!!」

痛い痛い痛いいいいっっつっ!!」

アルムの山にクララの叫び声が木霊します。

「わああああああああつっ!!」

痛いわハイジ! 折れる! 足が折れちゃう!」

「あーっはっはっは! 気分はどうクララ?」

これは時代劇なんかでよくある「ギザギザの床に正座させられる」という拷問。

今クララは両腕を縛られた状態で、まるで江戸時代の罪人のように、いつぱい角のついた床の上に正座させられていました。

「も……ものすごく痛い!!!」

とんでもない激痛よハイジ!! 耐え難い痛みだわ!!」

「さあ〜降参するなら今の内よクララ! はやく立ちなさい!」

ハイジは石で出来た板を、「よいしょ、よいしょ」とクララの膝に乗せていきます。その度に体重が増加し、どんどん床のギザギザが脛に食い込んでいきます。

「Oh! なんて痛いのかしらコレ! わーお!!」

このような痛み、未だかつて経験した事がないわハイジ! とつてもアメイジング
!!」

「ほら! 早くしないと足が折れちゃうわよ?!」

さあ立つて! 立つのよクララっ! 雄々しく立ち上がってみせて!!」

立ち上がろうにも膝に石板が乗っているし、両腕も後ろで縛られているのでどかせません。なのでクララはまったく動けないのですが……そんな理屈はアルムでは通りません。立つしかないです。

「ほら立ちなさいよクララ!! えーい!」

「ぎゃああああああ!! 痛い痛い痛いっ!!」

えーいという可愛らしい声と共に、ハイジがペチーンと鞭を振り下ろします。クララの服の背中部分が破け、傷だらけの肌が露出していきます。

「どう?! 立つ気になった?! 早く立ちなさいよクララ!!」

「嫌よ! わたし立たないわハイジ!」

ぜっつたいに立たないの!! ぎゃあああああ! 死ぬうくくっ!!」

「どうして立たないのよ！　いったい何が貴方をそうさせるのよ！

このファツキン・ゲルマン!!」

どれだけ鞭で打たれようとも、脛にギザギザが食い込もうとも、立とうとしないクララ。

か弱く儂げに見えるクララは、えも知れぬジャーマン・パワーを發揮し、激痛に耐えます。

「ほらもう膝の上の石板が、クララの座高より高くなつてゐるわ！

どうなのクララ?!　降参?　さあタツプしてよ！」

「面白いジョークねハイジ！」

わたしタツプなんて、そんな馬鹿な言葉は知らないの！

ドイツ帝国に名だたるゼーゼマン家に、後退の二文字は無いのよ!!

——ぜ　　つ　　た　　い　　に　　立　　た　　な　　い　　ッ　　!!」

クララは「ぬうえーい！」という気合と共に、頭突きをかまします。それによつて膝にあつた石板が木っ端みじんに砕け、クララの足が自由を取り戻しました。

「な……なんて破壊力なのクララッ?!

積みあがつた石板を頭突きで粉碎するなんて……超人ハルクでも出来ないわっ!?!」

「ハイジ！　わたし立ちたくないのよ！」

分かって頂戴ハイジ！ この想いを！」

「そんな人知を超えた身体能力を持つているのに、なんで立てないのよ！

そんなワケないでしょうクララ!! 分からないわよ!!」

ハイジが天井からぶらさがっている紐をへぐいつ〜と引つ張ります。するとクララの頭上に天井がパカッと開き、視界いっぱいもある巨大な岩が落ちてきました。

「?!?!」

「死ねえクララアアア——!!」

死にたくなければ立ちなさい！ 立って避けなさいっ!!」

クララを押し潰さんと迫ってくる巨大な岩。ハイジの高笑いが響く中、クララの目がキュピーンと光ります。

「ザッ——せええいッッ!!!!」

クララがその場から飛び上がり、サマーソルトキックを放ちます。その途端に巨大な岩がへバコオオ——ン!!〜みたいな音をたてて、砕け散りました。

「なっ……?! なによそれ!? クララいまジャンプしたじゃない!!」

いま3メートルくらい飛んだわよ!? やっぱり立ってるんじゃないの!!」

「ううん、立ってないわ？」

確かにジャンプはしたけれど、わたし立ってないわ？」

「うそお?!?!」

パニックに陥ったハイジは、バイキングが使うような両刃の斧を投げつけます。

それをクララがへくるくる！ シュバ！〜と躲してみせました。

「バク宙!? いまバク宙したわよクララ!? クララってそんな事も出来るの?!」

「うん、バク宙したわ? でも立ってないの。」

前宙も側宙も出来るけれど、わたし立ってないわ?」

「えつとお……足だけで全体重を支える筋力があつてえ。」

サマーソルトキックやバク宙が出来る身体能力と、

巨大な岩を粉々にできるパワーがあるけれど、立ってないのね?

——— そんなワケないでしょクララ! うそつき! クララのウソつき!!」

「分かつて頂戴ハイジ! おねがいよ!」

その代わりにわたし、立つ以外の事なら、なんだってやって見せるから!」

「あたしそんな屈強な女みた事ないわよ! どうして立たないのよクララ!」

手元にあつた鉄パイプをへぐにや!〜とへし曲げてみせながら、クララが誠心誠意

お願いします。肉体の強靭さを示します。

それを見て、また「むきやー！」っと怒ってしまったハイジ。

「もっ……もう知らないっ！ あたしクララなんて知らないっ！」

クララなんて一生そのままであれば良いんだわあ〜！ うわ〜ん!!」

「は……ハイジ?!」

今見た物にショックを受けたのか、情けない事を言う友達に愛想を尽かしてしまったのか……ハイジが泣きながらこの場を駆けだして行きます。

「ま……待って頂戴ハイジ！ 待って！」

「うるさい！ クララのアホおー!! 特権階級!!」

クララなんてもう知らないわあ〜!!」

ハイジは涙をまき散らしながら、どんどん遠ざかっていきます。クララは歩く事が出来ないで、ただこの場でそれを見送るばかり。

しかし……その時。

「ぬうわ……!!」

ああなんとという事でしょう!! ハイジが今、崖から落ちてしまったのです。

えんえんと泣きながら走っていたハイジは、足元にある崖に気づく事が出来ず、そのまま落ちてしまったのでした!

「……ハイジツ?! ハイジ!!」

ハイジはこの世を呪って死ぬ事を、しつかり心に刻みます。

(さよならクララ……色々あったけど、クララの事は嫌いじゃなかったわ。

あたしが居なくなっても、どうか元気でいてね……。

いつかきつと、立てるようになってね——)

クララの手から、だんだん握力が無くなっていきます。

そして「もう駄目だ」という、ハイジが心の中でちよつと早めの般若心境をムニヤムニヤし始めた、その時……奇跡は起こったのです！

『——ハイジッ!! 死なないでハイジッ!!』

なんとという事でしょう! だんだんと大きくなる声と共に、いまクララが走っているであろうバタバタという足音が、聞こえてくるではありませんか!!

「死んじやダメ! 死んではダメよハイジッ! ハイジイイイー!!」

「く……クララ?! まさか助けに来てくれたのっ?!

今も聞こえてくる、クララのドタドタという大きな足音。

ハイジはあまりの嬉しさにアドレナリンが出ちゃったのか、思わず「よっこいしょ」と懸垂の要領で身体を持ち上げ、崖からヒョコツと顔を覗かせました。

ハイジの身体がポーンと投げられ、そのまま地面にへドテツ!〜と着地します。とつても怖かったし、なんかもう半泣きだけれど……、無事生還です。

「ああつ！ 大丈夫ハイジ?! 怪我はない?!」

「えへへ……ありがとう。私は平気よクララ♪」

なんかへグルグルグル!〜と高速ででんぐり返りをし、ハイジのもとへ駆けつけるクララ。まるでストIIのブランカみたいです。途轍もない身体能力。

「ありがとう助けてくれて♪」

クララがいなかったらあだし、ミート・パテになつてたわ」

「良いのよハイジ！ ああ、本当に無事で良かったつ……い」

命つて素敵ねハイジ！ キラキラと輝いているわ！ まるで水面みなものように！」

クララに優しく手を引いてもらい、そのままギュつと抱きしめ合う二人。美しい光景です。

「ああハイジ！ ハイジツ！ 我が生涯の友ツツ!!」

何があろうと、ぜつたいに貴方を離しはしないわ！ 一生逃がさないからツツ!!!」

「あはは♪ クララつたらおもしろい♪ クソレズう♪」

—— さあクララ、帰りましょ！ あたしお腹空いちやつた♪」

やがて二人は肩を並べ……いえ片方は「しゃくとり虫みたいにウネウネしながら、おじいさんの待つ家へと帰って行きました。

クララは歩く事が出来ないのです、いつもこんな風にウネウネしながら、家の中を移動するのです。

ちなみに夜中に見たら、悲鳴を上げる位の気持ち悪さです。ハイジはいつまでたつても慣れません。

そして家に帰った二人は、いつもの如くチーズの乗ったパンを食べ、腹を満たします。毎日毎日こればかりで、正直な話もう飽き飽きしているのですが、ハイジもクララも死んだ目をしながら黙々と食事を進めました。贅沢は敵なのです。

やがて、しみつたれた粗末な晩飯を終えて曲がりなりにも腹を満たした二人は、いつものように藁のベッドで眠りに入ります。

こんなアルムのド田舎、しかも貧乏人であるハイジには、夜になったらする事など無いのです。

節約の為にランプの明りを落とし、とつとと寝るに限るのです。

「あ、ごめんなさいハイジ。すこし待ってもらえる？」

寝る前にやりたい事があるの」

「ん？ いいよクララ、待っててあげる♪ なにするの？」

そうしてベッドに寝転ぶハイジが見守る中、クララは日課であるヒンズークスワットに励みます。

「456……457……458！」

身体中から蒸気を発しながら、クララはえいさほいさと身体を上下します。

その肉体はまるで、鋼のよう——

アルプスの空気や環境が、きつとクララの健康に良い……そう言っていたおじいさんの言葉は、やっぱり間違いでは無かったようです。

クララの大腿四頭筋が、岩のように隆起していました。

「——1000ツ!!」

ふう……おまたせハイジ♪ さあ一緒に眠りましょう♪」

「うん！ それじゃあ寝よつかクララ♪」

あつ、あたしの胸とかお尻さわったらダメよ？

こっそりやってるつもりなんだろうけど、バレてるからね？」

そして二人はベッドに並び、仲良く眠りに入ります。

明日はどんな事をしようか……そう楽しく語らいながら……。

「ねえ、いま立ったり座ったりしてたよね？」

「ううん、してないわ？」

明日もまた、精魂尽き果てるまで遊ぼうね——
そう約束し、眠りに落ちていくのでした。